

シリーズ 西淀川記憶あつめ隊

Vol.24



小西明さん

阪神出来島駅前でゆうせい薬局を経営しておられ、西淀川の薬剤師会の会長でもある小西明さんからお話しを伺いました。

2018年9月20日
聞き取り

◆工場のお風呂

小西さんは1953年生まれ。1歳の時に大野にやってきました。当時はお父さんが大野でゆうせい薬局を営んでいました。健康保健の制度が整っておらず、病気がかかったら病院でなく薬局に行く時代です。まちの人の健康は薬局が担っていました。大野は古河鉱業がある地域で、工場の人がお客さんにも多く、

工場で働くお客さんに工場内のお風呂につれていってもらったこともあったそうです。工場内のお風呂は広くて無料でした。「大野は子どもが多くて、駄菓子屋さんでお小遣い握りしめて一銭洋食を食べたなあ」と、小西さんが語る工場と共に過ごす町の様子は活気があって楽しそうでした。公害については「工場から毒々しい色の排水が流れてるのを見たけれど、それが公害やったと思いつたのは、公害問題が騒がれてからだ」と、煙やにおいなどの公害の問題はあったけれど、当時は問題として捉えていたわけではなかったことが浮かび上がります。

◆ゆうせい薬局を出来島に

1960年代にはゆうせい薬局を出来島でも開業し、1985年頃に隣にあった牛乳屋が空いたので店舗を拡大しました。半日休みが月に二回で、12時間労働の「猛烈時代」。ポランタ



拡大した出来島駅前のゆうせい薬局(1985)

リグループの会議も夜中の2時までであったと振り返ります。「あのころはPOSシステムがなかったから、商品の値段は全部覚えてた。商品の値段ラベルを張る暇もなかった。売るのも大変やったけれど仕入れも大変で、売れ筋の商品の勉強会を夜中にやったり、チラシを作ったり、共同仕入れのグループを作ったり。このグループは最初は府内だけだったけれど、今は全国区になってるよ」とのこと。システムが未成熟の中で小売

が生き残りをかけて試行錯誤していた様子がうかがえます。「いろんな可能性を考えて、丹波篠山あたりでドラックストアにしよるかと思って1989年にアメリカに研修にも行った。でも、ドラックストアにはしなかつた。お店はほとんど忙しくなつて高校生アルバイトも雇つて、売り上げが上がっていくけれど、お客さんとしゃべる暇もなくて面白くない。クリニックの横の調剤薬局にはならず、みんなが使う一般薬も置いて、地域の人の健康を支える健康サポート薬局としてやっていこうと思つた」と、大野で営業していた薬局の流れをくんだ薬局運営を選ぶこととなりました。

◆健康サポート薬局として

健康サポート薬局の認定は、ゆうせい薬局だけではなく、西淀川のほかの薬局でも進めており「西淀川区薬剤師会は人口当たりの健康サポート薬局数が日本一」となっています。

小西さんは地域の健康相談を担えるようにと、ケアマネージャーの資格までとりました。



「町の人と親しいだけではだめで、信頼されるためには知識も重要やし、相談を受けるためには心地よさも重要」ということで、2018年に新装オープンした新店舗には待合スペースと相談スペースが設けられています。2階には「ゆうせいホール」があり、セミナーや趣味の会に使えるスペースや、キッチンが整備された食堂があり、地域の人に貸し出ししています。出来島商店会は「インターナショナル出来島から☆きら通り」と名乗って、外国人居住が多い地域の特性に対応したり、ユニークな活動を生み出しています。このスペースが出来島の文化と「ワクワク」した気持ちを作り出していくのだからなと感じたヒアリングでした。林